

青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 1

木製容器・かご

2005

鳥取県埋蔵文化財センター



序

青谷上寺地遺跡は、弥生文化の宝庫です。約2000年の間、地中の良好な保存環境に守られて静かに眠っていた出土品の数々は、弥生人の脳をはじめ、今日の私たちの眼前に弥生の世界を鮮やかに甦らせてくれます。

なかでも青谷上寺地の弥生人たちは、実に秀麗な木製の容器を作り上げるなど、もの作りに長けた人々であり、木器に限らず骨角器、石器などにも、当時の加工技術の粋が結集されているといえるでしょう。また金属器や土器には環日本海を舞台とした広域な交流がうかがわれる品々も含まれており、「もの作り」と「交流」は青谷上寺地遺跡にとって重要な2つのキーワードとすることができます。

すなわち本遺跡出土品の調査研究によって、弥生時代の暮らし振りや優れたもの作り技術について解明する手掛かりが得られ、また地域間交流の実態解明にも迫れるものと思われます。このように青谷上寺地遺跡は、我が国の弥生時代研究に多くの情報を提供出来る重要な遺跡であるといえるでしょう。

鳥取県埋蔵文化財センターでは、我が国の弥生文化研究に資する情報の蓄積と青谷上寺地遺跡の保存活用に向けた情報の発信を目指し、平成14年度から木製品、金属器、骨角器などテーマごとに年次計画を作成し、青谷上寺地遺跡出土品の調査研究事業に着手してまいりました。本書は平成14年度から調査研究に取り組んでまいりました木製容器とかごをテーマとした成果報告であります。所期の目的にわずかでも貢献できれば幸甚です。

本調査研究にあたりましては、関係各位、諸機関から多大なる御指導、御助言をいただきました。心から感謝申し上げますとともに、今後とも青谷上寺地遺跡の調査研究に対しまして、より一層の御理解、御協力をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

平成17年3月

鳥取県埋蔵文化財センター
所長 田中弘道

凡 例

- 1 本書は、鳥取県埋蔵文化財センターが平成14年度から16年度にかけて「遺跡出土品調査研究等事業」の一環として実施した青谷上寺地遺跡出土の木製容器及びかごに関する調査研究の成果を報告するものである。
- 2 これまでに刊行された青谷上寺地遺跡に係る調査報告書は、以下のとおりである。

(分布調査に関するもの)

青谷町教育委員会	1997年	『青谷町内遺跡発掘調査報告書』
青谷町教育委員会	1998年	『青谷町内遺跡発掘調査報告書』
青谷町教育委員会	2004年	『青谷町内遺跡発掘調査報告書』
青谷町教育委員会	2004年	『青谷町内遺跡発掘調査報告書』

(記録保存調査に関するもの)

財団法人鳥取県教育文化財団	2000年	『青谷上寺地遺跡』1
財団法人鳥取県教育文化財団	2000年	『青谷上寺地遺跡』2
財団法人鳥取県教育文化財団	2001年	『青谷上寺地遺跡』3
財団法人鳥取県教育文化財団	2002年	『青谷上寺地遺跡』4

(範囲確認調査、内容確認調査に関するもの)

鳥取県埋蔵文化財センター	2002年	『青谷上寺地遺跡』5
鳥取県埋蔵文化財センター	2003年	『青谷上寺地遺跡』6
鳥取県埋蔵文化財センター	2004年	『青谷上寺地遺跡』7
- 3 本書は、平成13年度までに出土した木製容器及びかごを収録対象としており、基本的に既刊報告書掲載分についても収録している。
- 4 本報告書における調査区・層位・遺構名は、財団法人鳥取県教育文化財団『青谷上寺地遺跡』1～4に準拠している。
- 5 本調査研究は、下記の方々の御指導のもと実施した。(敬称略、順不同)

大阪府立狭山池博物館 工楽善通
 独立行政法人奈良文化財研究所 深澤芳樹、肥塚隆保、高妻洋成
 奈良教育大学 金原正明
 バスケットリー作家 本間一恵、宮下敏子
 鳥取県商工労働部兼農林水産部市場開拓課地産地消推進室 大江啓司
- 6 本調査研究は、木製容器を高垣陽子(平成14～15年度)、茶谷 満(平成16年度)、かごを野田真弓が担当した(以上鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事)。
- 7 本書の作成は、鳥取県埋蔵文化財センターが実施した。編集は野田真弓、茶谷 満が行った。執筆は、第1章を北浦弘人(鳥取県埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査係長)、第2章を茶谷 満、第3章の第1～8節を野田真弓が担当し、第9節はバスケットリー作家 本間一恵氏にお願いした。第4章は第1節を独立行政法人奈良文化財研究所の高妻洋成氏、脳谷草一郎氏、肥塚隆保氏、佐藤昌憲氏に、第2節を奈良教育大学の金原正明氏にお願いした。遺物の実測、図面の浄書は鳥取県埋蔵文化財センターで行った。遺物写真は、独立行政法人奈良文化財研究所の牛嶋 茂氏、杉本和樹氏撮影によるものに加え、鳥取県埋蔵文化財センター撮影によるものを掲載した。
- 8 本書に関わる記録類及び出土遺物は、鳥取県埋蔵文化財センター秋里分室に保管されている。

- 9 本調査研究報告書の作成にあたっては、上記の方々のほかに多くの方々からの御助言、御支援をいただきました。明記して深謝いたします。(敬称略、順不同)

光谷拓実(独立行政法人奈良文化財研究所) 渡辺 誠(山梨県立考古博物館) 名久井文明(物質文化研究所一芦舎) 千種 浩(神戸市教育委員会) 橋本正博(小松市教育委員会) 熊代昌之(久留米市教育委員会) 川畑和弘(守山市教育委員会) 千葉敏朗(東村山市遺跡調査会) 阿刀弘史(滋賀県立安土城考古博物館) 中川 寧(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター) 入江宜明(若桜町立わかさ生涯学習情報館) 森 佳樹(青谷上寺地遺跡展示館) 道念秋子(河内村商工会) 小松順吉 小松順太郎 小柴吉男 清水公之 岸本秋男 佐々木由香 松永篤知 村上由美子

独立行政法人奈良文化財研究所 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

富山県埋蔵文化財センター (財)石川県埋蔵文化財センター 金沢市埋蔵文化財センター

加賀市教育委員会 滋賀県埋蔵文化財センター 滋賀県立安土城考古博物館

小松市教育委員会 大分県産業科学技術センター 三島町生活工芸館 河内村商工会

福島県立博物館 福井県立若狭歴史民俗資料館

財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センター 青谷町(現鳥取市)

青谷町教育委員会(現鳥取市教育委員会) 青谷上寺地遺跡展示館 鳥取県産業技術センター

- 10 遺物実測図における表示は以下のとおりである。



- 11 木製容器の実測図縮尺は基本的に1/4と1/6にした。ただし遺物によっては任意で縮尺を変更している。

- 12 木製容器の実測は、表面の木目などは記入せずに、加工痕、炭化範囲、彩色などを表現した。また断面図に概念的な木取りを記入しているが、木口面ではない断面図には木取りを記入していない。実測図に記した矢印は目釘(木釘)または目釘孔を示し、観察表中の法量の は残存長を、()は復元径を示す。

- 13 かご及び編み物の実測図縮尺は基本的に1/3と1/4にした。ただし遺物によっては任意で縮尺を変更している。

- 14 本報告書において、遺構名に略称を用いたものは次のとおりである。

SA：杭列 SD：溝状遺構 SK：土坑

目次

序

凡例

第1章 序論	1
第1節 出土品調査研究の経緯	1
第2節 遺跡の概要	1
第3節 木製容器の出土状況	3
第2章 青谷上寺地遺跡出土の木製容器	5
第1節 弥生時代木製品の研究略史	5
第2節 器種の構成と分類	5
第3節 青谷上寺地遺跡出土木製容器の特性	81
第4節 他地域との比較	85
第5節 まとめと課題	87
第3章 青谷上寺地遺跡出土のかご	93
第1節 概要	93
第2節 部位に関する用語の定義	94
第3節 編み方に関する用語の定義	95
第4節 部位と編み方	97
第5節 編み方	102
第6節 形態	107
第7節 法量	116
第8節 考察・まとめ	121
第9節 弥生のかごを復元する	139
	バスケットリー作家 本間 一恵
第4章 自然科学分析の成果	145
第1節 青谷上寺地遺跡出土遺物の彩色に関する調査	145
	独立行政法人 奈良文化財研究所 高妻 洋成・脇谷草一郎・佐藤 昌憲・肥塚 隆保
第2節 青谷上寺地遺跡出土かごの材質同定	155
	奈良教育大学 金原 正明 古文化財科学研究室

挿 図 目 次

第1図	青谷上寺地遺跡位置図.....	1	第41図	底板(1).....	43
第2図	青谷上寺地遺跡出土 木製容器分布図(弥生時代中期)...	3	第42図	底板(2).....	44
第3図	青谷上寺地遺跡出土 木製容器分布図(弥生時代後期)...	4	第43図	底板(3).....	45
第4図	木取りの種類.....	6	第44図	把手・その他.....	46
第5図	高杯(1).....	7	第45図	蓋形態模式図.....	47
第6図	高杯(2).....	8	第46図	蓋(1).....	47
第7図	高杯(3).....	9	第47図	蓋(2).....	48
第8図	高杯(4).....	10	第48図	蓋(3).....	49
第9図	高杯(5).....	11	第49図	蓋(4).....	50
第10図	高杯(6).....	12	第50図	蓋(5).....	51
第11図	高杯(7).....	13	第51図	蓋(6).....	52
第12図	高杯(8).....	14	第52図	蓋(7).....	53
第13図	高杯(9).....	15	第53図	蓋(8).....	54
第14図	高杯(10).....	16	第54図	蓋(9).....	55
第15図	高杯(11).....	17	第55図	蓋(10).....	56
第16図	高杯(12).....	18	第56図	槽・盤類(1).....	57
第17図	高杯(13).....	19	第57図	槽・盤類(2).....	58
第18図	高杯(14).....	20	第58図	槽・盤類(3).....	59
第19図	椀・杯形容器(1).....	21	第59図	槽・盤類(4).....	60
第20図	椀・杯形容器(2).....	22	第60図	槽・盤類(5).....	61
第21図	椀・杯形容器(3).....	23	第61図	槽・盤類(6).....	62
第22図	椀・杯形容器(4).....	24	第62図	刳物箱ほか(1).....	63
第23図	椀・杯形容器(5).....	25	第63図	刳物箱ほか(2).....	64
第24図	桶形容器.....	26	第64図	刳物箱ほか(3).....	65
第25図	壺(1).....	27	第65図	刳物箱ほか(4).....	66
第26図	壺(2).....	28	第66図	曲物底部の形態模式図.....	67
第27図	桶(1).....	29	第67図	曲物(1).....	67
第28図	桶(2).....	30	第68図	曲物(2).....	68
第29図	桶(3).....	31	第69図	指物(1).....	69
第30図	桶(4).....	32	第70図	指物(2).....	70
第31図	桶(5).....	33	第71図	指物(3).....	71
第32図	桶(6).....	34	第72図	指物(4).....	72
第33図	桶(7).....	35	第73図	その他(1).....	73
第34図	桶(8).....	36	第74図	その他(2).....	74
第35図	桶(9).....	37	第75図	その他(3).....	75
第36図	桶(10).....	38	第76図	既出資料(1).....	76
第37図	桶(11).....	39	第77図	既出資料(2).....	77
第38図	桶(12).....	40	第78図	既出資料(3).....	78
第39図	桶(13).....	41	第79図	既出資料(4).....	79
第40図	桶(14).....	42	第80図	既出資料(5).....	80
			第81図	器種組成グラフ.....	81
			第82図	器種別出土時期グラフ.....	81

第83図	高杯時期別グラフ.....	82	第109図	かご(7) - A - 2類	112
第84図	桶器高ヒストグラム.....	82	第110図	かご(8) - A - 2類	113
第85図	桶底の分類.....	83	第111図	常代遺跡かご出土状況.....	113
第86図	桶底集計グラフ.....	83	第112図	福岡遺跡かご出土状況.....	114
第87図	器種別樹種統計グラフ.....	84	第113図	かご(9) - C - 2類	115
第88図	器種別木取り集計グラフ.....	84	第114図	かご(10)底部形が または のもの ...	116
第89図	編み物の種類.....	93	第115図	かご(11)大型品 - 1	118
第90図	編み物出土分布図.....	94	第116図	かご(12)大型品 - 2	119
第91図	かごの各部位.....	95	第117図	かご(13)大型品 - 3	120
第92図	「超え」「潜り」「送り」の模式図 ...	96	第118図	青谷上寺地遺跡編組パターン一覧...	124
第93図	帯部形成一覧.....	97	第119図	出土かご編組パターン表(1)	128
第94図	編み方の模式図・拡大写真(1) ...	98	第120図	出土かご編組パターン表(2)	129
第95図	部位別 編み方使用頻度.....	99	第121図	編組パターン比較表.....	129
第96図	編み方の模式図・拡大写真(2) ...	100	第122図	巻縁 2 - 1	131
第97図	編み方の模式図・拡大写真(3) ...	101	第123図	当縁.....	131
第98図	縁の前処理・親骨.....	102	第124図	縄目返し縁 3 - 2	131
第99図	かご(1)木目ござ目編み.....	103	第125図	マタタビ製かご類分布図.....	133
第100図	八日市地方遺跡かご出土状況.....	104	第126図	東北型網代圧痕分布図.....	133
第101図	八日市地方遺跡かご出土状況.....	104	第127図	四ツ目編み.....	141
第102図	かご(2)六ツ目編み.....	104	第128図	ヨコ添えもじり編み.....	141
第103図	池子遺跡かご出土状況.....	104	第129図	矢筈巻縁.....	141
第104図	かご(3)もじり編み.....	105	第130図	復元かごの仕様.....	144
第105図	網代 その他網代編み.....	106	第131図	試料19 FT - IRスペクトル.....	152
第106図	かご(5) - A - 1類	108	第132図	試料65 FT - IRスペクトル.....	152
第107図	津島遺跡かご出土状況.....	109	第133図	試料80 FT - IRスペクトル.....	152
第108図	かご(6) - A - 1類	110			

挿 表 目 次

表1	木製容器分類表.....	5	表10	青谷上寺地遺跡出土かご観察表(1).....	137
表2	木製容器樹種一覧表	6	表11	青谷上寺地遺跡出土かご観察表(2).....	138
表3	木製容器編年表(1)	89	表12	顔料分析試料一覧表(1)	148
表4	木製容器編年表(2)	90	表13	顔料分析試料一覧表(2)	149
表5	木製容器編年表(3)	91	表14	顔料分析試料一覧表(3)	150
表6	木製容器編年表(4)	92	表15	用いられていると推察される 顔料による遺物の分類	151
表7	ヨコ添えもじり編みの確認された遺跡一覧.....	130	表16	青谷上寺地遺跡 出土かご材質同定一覧	157
表8	縁仕舞出土例一覧表	132			
表9	弥生時代編み物出土遺跡一覧	136			

写真目次

写真1	青谷上寺地遺跡周辺の地形	1	写真42	指物と線刻板	69
写真2	調査区全景	2	写真43	その他(容器脚)	73
写真3	青谷上寺地遺跡出土の鉄製加工具	2	写真44	既出資料(桶形容器)	77
写真4	大量の木製品出土状況	4	写真45	親骨の施されたかご	102
写真5	指物出土状況	4	写真46	第102図のかご	104
写真6	高杯(1)	7	写真47	第104図のかご	105
写真7	高杯(2)	9	写真48	第105図の網代	106
写真8	高杯(3)	11	写真49	第106図のかご	108
写真9	高杯(4)	13	写真50	マタタビ材で復元したかご	108
写真10	高杯(5)	15	写真51	第108図のかご	109
写真11	高杯(6)	17	写真52	底部を木材で補強するかご	109
写真12	高杯(7)	19	写真53	不明木製品	110
写真13	椀・杯形容器(1)	21	写真54	マタタビ材で復元したかご	111
写真14	椀・杯形容器(2)	23	写真55	親骨の緊縛方法	111
写真15	椀・杯形容器(3)	24	写真56	親骨の施されたかご	111
写真16	椀・杯形容器(4)	25	写真57	第109図のかご	112
写真17	桶形容器	26	写真58	第110図のかご	113
写真18	蓋と壺	27	写真59	マタタビ材で復元したかご	113
写真19	蓋と壺および出土状況	28	写真60	第113図のかご	115
写真20	桶(1)	29	写真61	第113図のかご拡大写真	115
写真21	桶(2)	31	写真62	第114図のかご	116
写真22	桶(3)	32	写真63	第115図のかご	118
写真23	桶(4)	33	写真64	第116図のかご	119
写真24	桶(5)	34	写真65	第117図のかご	120
写真25	桶(6)	35	写真66	マタタビの表皮の除去	121
写真26	桶(7)	36	写真67	マタタビの分割	121
写真27	桶(8)	37	写真68	ヒゴの調整	121
写真28	桶(9)	39	写真69	復元したかご	139
写真29	底板	43	写真70	マタタビ細工の作業風景	140
写真30	把手	46	写真71	わたたのソーケ	140
写真31	蓋(1)	47	写真72	使い込まれたこつら細工	141
写真32	蓋(2)	50	写真73	試料19 塗膜構造	153
写真33	蓋(3)	51	写真74	試料65 塗膜構造	153
写真34	蓋(4)	52	写真75	試料80 塗膜構造	153
写真35	蓋(5)	53	写真76	試料81 塗膜構造	153
写真36	蓋(6)	55	写真77	試料82 塗膜構造	154
写真37	槽・盤類(1)	57	写真78	試料83 塗膜構造	154
写真38	槽・盤類(2)	60	写真79	試料84 塗膜構造	154
写真39	刳物箱ほか(1)	65	写真80	青谷上寺地遺跡 出土かご材質同定顕微鏡写真	158
写真40	刳物箱ほか(2)	66			
写真41	曲物	67			

第1章 序論

第1節 出土品調査研究の経緯

青谷上寺地遺跡の発掘調査は、平成8、9年度に青谷町教育委員会（現鳥取市教育委員会）によって実施された試掘調査が最初である。一般国道9号（青谷・羽合道路）青谷改築工事等の道路建設事業との調整のため、実施されたものである。この調査の結果を受け、平成10年度から13年度にかけて（財）鳥取県教育文化財団により記録保存調査が実施され、大規模な護岸設備や矢板列、「弥生の博物館」と称されるほどの多種多量の遺物が出土した。

遺跡の様相が明らかにされ、その重要性が認識されるに至り、平成13年度に鳥取県教育委員会事務局文化課内に「妻木晩田・青谷上寺地遺跡整備室」が設置され、鳥取県として遺跡の保存、活用、整備に取り組む体制が整えられた。併せて同年度より、鳥取県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施されることとなった。国史跡指定申請に向かい、遺跡の範囲確認と集落構造を把握するための内容確認を目的とするものであり、次第に遺跡の具体像が明らかになってきている。

平成14年度から鳥取県埋蔵文化財センターでは、発掘調査とともに、弥生文化研究に資する情報の蓄積と青谷上寺地遺跡の保存活用に向け

た情報の発信を目指し、木製品、金属器、骨角器などテーマごとに年次計画を作成し、青谷上寺地遺跡出土品の調査研究事業に着手している。本報告書の刊行もその一環であり、平成16年度までに実施した木製容器及びかごについての調査研究成果を報告するものである。今回の調査研究では、青谷上寺地遺跡出土資料の集成と形式学的特性の抽出、他地域との比較検討に主眼を置いた取り組みを行ってきた。

木製容器は資料総数1030点、かごは資料総数59点にのぼり、我が国の弥生時代遺跡において出色の数量であり、ゆえにこれらの調査研究は、青谷上寺地遺跡の特性を明らかにするとどまらず、弥生文化を研究する上でもスタンダードな情報を提供できるものと考えている。

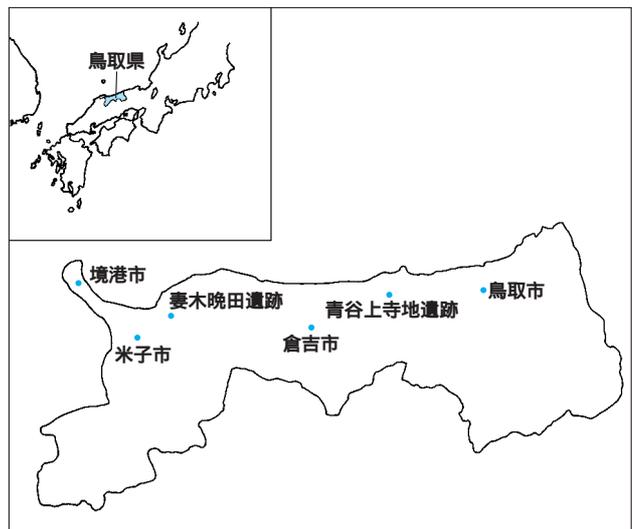
第2節 遺跡の概要

青谷上寺地遺跡の所在は、鳥取県鳥取市青谷町大字青谷から大字吉川にかけて確認されている。鳥取市の西端にあたり、平成16年の市町村合併以前は気高郡青谷町であった。因幡国の西端にあたり、遺跡から西へ約2kmで伯耆国に行き当たる。

遺跡の立地する青谷平野は、海岸部近くの狭小な沖積平野であり、縄文期には入り江であっ



写真1 青谷上寺地遺跡周辺の地形



第1図 青谷上寺地遺跡位置図

たが、砂州の発達によって日本海と遮断され、潟湖へと変貌した。その西岸のほとりに遺跡が成立したのは弥生時代前期末葉であり、その後奈良時代まで存続することが確認されている。

潟湖という天然の良港に恵まれ、漁撈が盛んに営まれたものとみられ、独木舟や櫂、骨角製漁撈具の出土が顕著である。一方遺跡南西側の低地部には、遺跡成立当初から水田域が形成されており、畦畔が検出されているほか、木製農具類の出土も多数みられ、農業も主要な生業であったことが窺われる。

潟湖と水田域に挟まれた地帯は、遺跡成立当初から土坑や焼土域、小型ピットなどの遺構や遺物が集中するエリア（以下遺跡中心部と呼称する）であり、そこから東の潟湖側に向かって貝塚が形成されている。その後も貝殻以外の廃棄行為も顕著になっていき、潟湖は徐々に埋まっていく。その上層に土坑等の遺構が継続して形成され、遺跡中心部の範囲は東へと拡張していくのである。

遺跡に構造的な変化が現れるのは、弥生時代中期後葉においてである。遺跡中心部内では前代同様の土坑や焼土域などが引き続き形成されるが、一方その縁辺部では大型の溝SD27や多数の木造構造物が造られるようになる。

弥生時代後期になると、遺跡中心部を囲繞する溝が築かれる。中心部の東側と西側、さらに南側で検出されており、いずれの溝も中心部側の岸辺にのみ矢板列を打ち込むという同じ構造をもつ。東側の溝SD38からは、弥生時代後期後半段階の埋葬状態ではないと考えられる人骨が5300点以上、約100人分が出土した。これらの中には、脳を内部に残す頭蓋骨3点や殺傷痕のある人骨110点が含まれている。殺傷痕人骨の最小個体数は10体分となり、その構成には老若男女が含まれていた。何らかの殺戮行為に関わる惨状と見るべきであろう。

遺跡はこの惨状後も途絶えることなく存続し、弥生時代終末期以降も遺構が形成され、奈良時代に至っても古代山陰道の沿線の地として継続



写真2 調査区全景



写真3 青谷上寺地遺跡出土鉄製加工具

する。

青谷上寺地遺跡では、現在までのところ全時代を通じて竪穴住居跡を確認しておらず、遺跡中心部の性格を集落域と断定しづらい状況にある。しかし、遺跡中心部に未製品や素材、加工具が集中的に出土する工房域と推定されるエリアがあり、その周辺に端材や廃材を投棄していることが明らかになりつつある。木製品、骨角器、鉄器、石器、玉類等の生産、加工を行っていたことが想定され、集落の機能に具体的に言及する資料が整いつつある。

このように「もの作り」は青谷上寺地遺跡のキーワードのひとつである。青谷上寺地遺跡で

は、弥生時代中期における鉄器導入以来、舶載の鑄造鉄斧が入手、再加工されて、板状の斧や鑿に作り変えられ、併せて加工用の斧、鑿、やりがんな、刀子、楔、穿孔具といった‘もの作り’の道具が優先的に獲得されていく。鉄器の出土点数は300点を超え、本州では突出して多い。これらの道具が、秀麗な木製容器や精巧な骨角器などを製作する高度な加工技術を支えている。鉄器の未製品や裁断痕をもつ鉄片も出土しており、鉄器自体についても、小鍛冶程度の加工は行っていたようである。

もうひとつのキーワードは‘交流’である。貨泉や鑄造鉄斧、有肩鉄斧、朝鮮半島系無文土器など海外との関わりを示唆する出土遺物をはじめ国内他地域との交流を示す遺物もみられ、海を背景とした広域交流の拠点であった蓋然性は高いが、実証的な実態解明が今後の課題である。

第3節 木製容器の出土状況

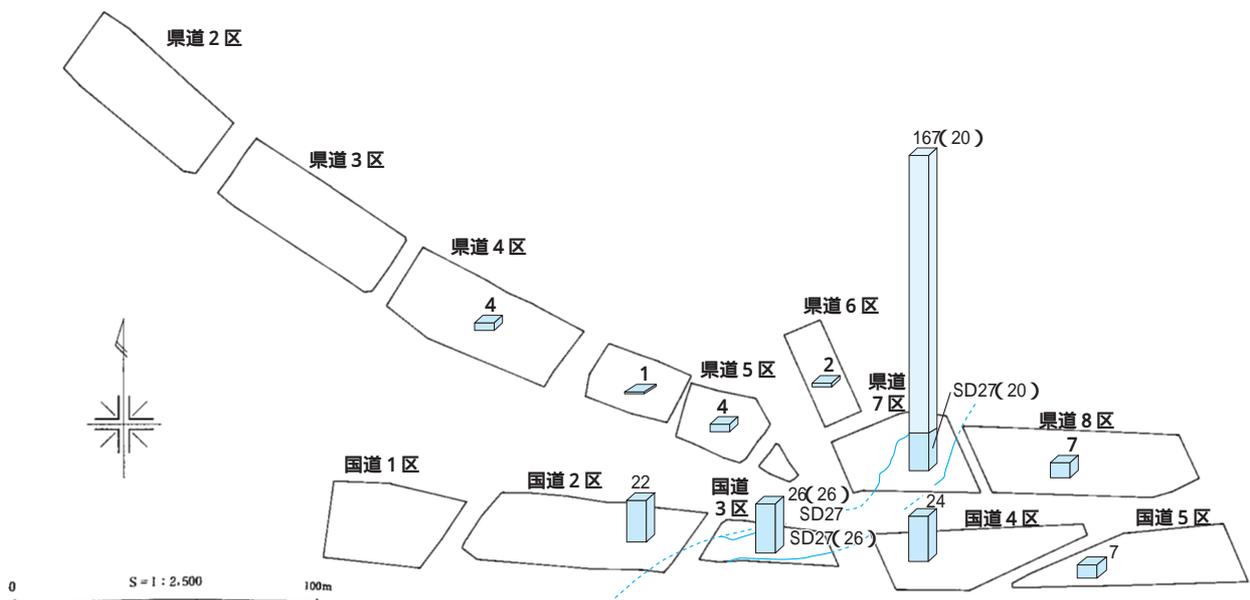
青谷上寺地遺跡からは、総数9993点の木製品が出土している。その内訳は、斧柄などの工具75点（0.8%）、鋤鍬類などの農具645点（6.5%）、紡錘車などの紡織具が67点（0.7%）、タモ枠などの漁撈具が251点（2.5%）、盾などの武具が100点（0.1%）、縦櫛など服飾具が63点（0.6%）、匙など食事具が134点（1.3%）、楽器（琴）10点

（0.1%）、形代など祭祀具が76点（0.8%）、火鑽白など雑具が122点（1.2%）、建築材3573点（35.8%）、その他器種不明品3847点（38.5%）である。本調査研究の対象である容器類は1030点（10.3%）に上る（以上平成13年度までの集計結果より）。

出土木製品の数量組成において、建築材や器種不明品以外の器種の中で特に容器類の占める割合が高い。このような傾向は弥生時代の日本海沿岸地域において見受けられるが、中でも傑出した出土数量と言える。地中の埋蔵環境が良好な青谷上寺地遺跡であるがゆえに木製容器を多用する生活様式が如実に保存されたのであろうが、木製容器が多量に包蔵されている地点を調査し得たこともポイントとなる。

そこで木製容器の出土状況から、その出土パターンを検討してみる。図2は弥生時代中期までの、図3は後期の木製容器の調査区別出土数量をそれぞれ柱状グラフで示している。柱状グラフには、その調査区内の主な遺構での出土数量も区分して表示している。

弥生時代中期においては、遺跡中心部南東側縁辺部または中期後葉の大型溝SD27内からの出土が圧倒的である。これに対し中心部西側の水田域方面では、出土があまりみられない。後期では、遺跡中心部を囲繞する溝からの出土が顕



第2図 青谷上寺地遺跡出土木製容器分布図（弥生時代中期）

著になる。人骨を多量に出土した東側の溝SD38からの出土数が多いが、祭祀場を伴う西側の溝SD11やそのさらに西側に展開する溝SD20からの出土もみられるようになる。しかしいずれの時期においても、遺跡中心部内からの木製容器の出土数量は、その縁辺部よりも大幅に下回っている。

こうした出土傾向は木製容器に限るものではなく、かごをはじめその他の遺物にも共通しており、縁辺部での廃棄行為の結果と捉えることができる。弥生時代中期においては東側の潟湖方面が、後期においては囲繞する溝とその外側が主な廃棄エリアとされており、このことは当時の廃棄行為の行動原理の変遷を示すものとして興味深い。

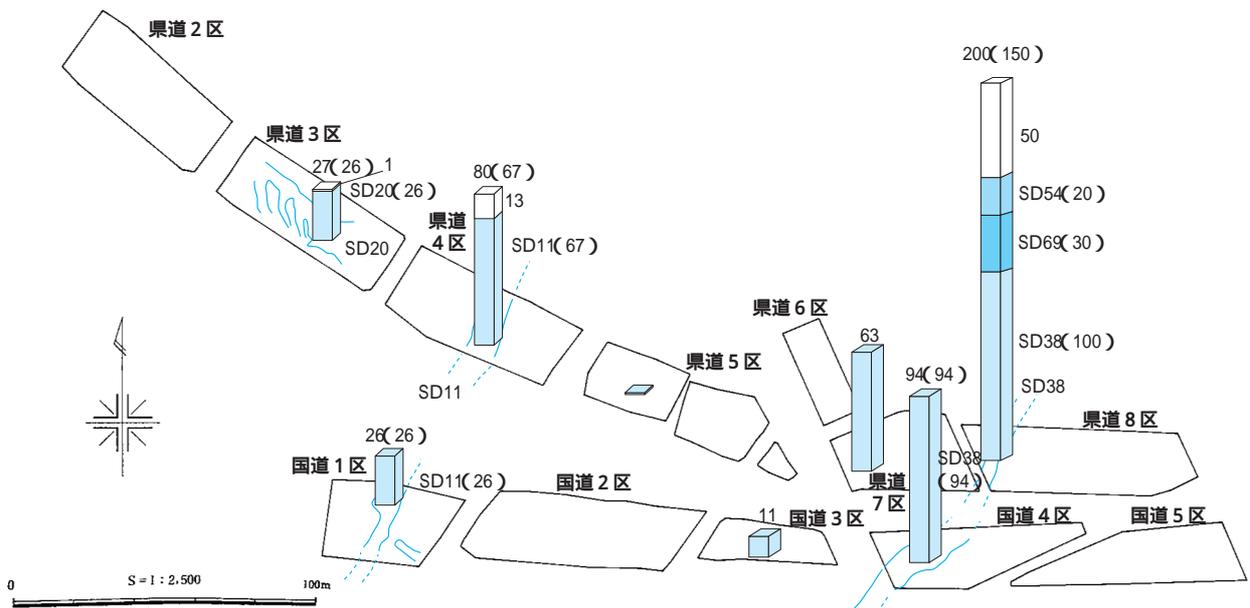
木製容器の多くは破損状態で出土しており、廃棄物であることを如実に示すが、縦に大きく割れているなど人為的な破棄を窺わせる状態のものも目立つ。特別な廃棄パターンは見出せないものの、意図的に使用を中止され遺棄された木製容器が含まれている可能性はある。詳細な破損パターンの検討が必要であるが、他遺跡出土例での検証が不可欠であり、今後の課題としたい。



写真4 大量の木製品出土状況



写真5 指物出土状況



第3図 青谷上寺地遺跡出土木製容器分布図（弥生時代後期）